

答 辞

初梅の蕾は今まさに満開の頃を迎え、ここ、兎原の里には芳しい香りが漂っています。本日、私たち四回生は長年慣れ親しんだ本校を卒業します。

2012年4月。今までの生活と何もかもががらりと変わり、期待交じりの戸惑いの中で、私たちは中等教育学校に入学しました。前期課程では、学業はもとより日々の活動に皆が一生懸命取り組みました。13歳の私たちは「自分は十分大人だ」と思いながらも、未熟さゆえに多くの人の厚意を無にしたり何気なく人を傷つけたりしたこともあったのだろうと思います。それでも私たちの胸の中に前期三年間が今なお素晴らしいものとして焼き付いているのは、ひとえにその未熟さを受け入れ、愛ある眼差しで私たちを見守り続けてくださった先生方のおかげです。

3年生の後半から4年生の間は、私たち4回生にとって大変印象深い時でした。

過渡期における生徒の宿命とはいえ、明石校舎出身の生徒にとっては、^{まなびや}学舎が永遠に閉鎖され、二度とその土を踏むことができないという事実は日を追うごとに重みを増し、途方もない悲しみと虚しさを私達の胸に深く残しました。自分でも掴みきれない思いを大多数の異質な人々の中に投げ込み、いかにうまく昇華させることができるかが重要でした。そのために相応しい協調の一点を探りながら、明石校舎出身の生徒は自らのアイデンティティを探し始めたように思います。

住吉の生徒も明石の生徒や帰国生を迎え、校舎は同じといえども新たな環境になりました。住吉の生徒にも「新しい仲間とうまくやっていけるのだろうか」という不安がありました。しかし、授業や昼休みなどの日々の生活や合唱コンクールなどの行事を共に過ごすうちに意気投合し、次第に「明石校舎」「住吉校舎」といった枠組みがなくなり、「4回生」として1つにまとまってゆきました。部活動でも両校舎出身のメンバーが肩を並べ1つの目標に向かい努力を重ねてきました。辛い練習や本番の重圧といった様々な困難を共に乗り越え、同じ喜びを分かち合った仲間たちと過ごした時間は何物にも代えがたい思い出です。

私たちは、兎原祭を創っていく中でたくさんの方のことを学びました。特に兎原祭実行委員会では、広い視野を持ち客観的に見ることの難しさを学びました。企画を立案したものの先生方に認めてもらえなかったり却下されたりして私たちの考えの甘さを突き付けられ、実現できなかった企画も多数ありました。そんな中でも先生方のお力を借りながら、仲間と協力し合い、それぞれが出来ることは何かを考え粘り強く取り組んできたからこそ、兎原祭は成功を収められたのだと思います。

中でも特に印象に残っているのは、演劇です。4回生が兎原祭で演劇を行うことが決まった時、4回生の中では様々な思いが渦巻いていました。全力で演劇に取り組もうとする人もいれば、あまり乗り気でなかった人もいました。しかし、クラスでの話し合いを重ね

るごとに皆が自分に与えられた役割を自覚するようになり、クラスが一致団結して演劇を成功させたいと思えるようになりました。私たちは演劇を通して、個々の力では成しえないような大きな力を出せるということを学び、それを人に見ていただける喜びを知りました。

私たちは、5年生の4月から、卒業論文の執筆に向けた課題研究をスタートさせました。研究の右も左もわからなかった私たちは何度もテーマを修正したり、研究の方向性を変更したりしました。また、研究が進むにつれて、自分でデータを収集する必要を感じ、実験やアンケート調査、インタビューなど、自分で計画を立てて研究の内容を充実させるよう努めました。また、18000字という想像を超えた長文を書くにあたり、睡眠時間を削ったり、遅くまで学校に残ったりして一人ひとりが努力を重ね、互いに励ましあいながら論文を書いていきました。その結果として、4回生の全員が最終論文を期日までに仕上げることができたことは、大きな成果だと思います。この学校を卒業する今、自分自身の研究をふりかえってみると、至らなかった点ばかりが思い浮かびます。しかし、卒業論文を書いたという紛れもない事実は、私たちが次のステージへ進み研究を行う時に、大きな支えになってくれることでしょう。

5年生の秋、4回生の集大成としてイギリス修学旅行に行きました。情勢が不安定だったイギリスに行くことは、私たち以上に両親の不安をかき立てたことでしょう。それでも家族が笑顔で見送ってくれたお陰で、私たちは多くの学びを得ることができました。言語の壁を超えるコミュニケーションの術はもちろん、日本とは全く異なる生活や文化をも実際に体験して学ぶことができました。とりわけ、学びの中で大きかったことは、「これまでの私は、日本の中で通用するだけの狭い視野で世界を見ているに過ぎない」ということに気づけたことだと思います。私たちは「井の中の蛙」であり、それを自覚して初めて、外の世界に積極的に働きかけることの大切さがわかりました。修学旅行で学んだ、視野を広く持ち、思考の幅を広げる大切さは、私たち一人ひとりを精神的に成長させてくれたと思います。

6年生になり、私たち4回生はいよいよ受験という大きな試練に挑戦することとなりました。休み時間も参考書片手に過ごす人が増え始め、だんだんと皆の受験に向けての緊張は高まっていきました。その中で私たちを励ましてくれたのは、「受験は団体戦である」という言葉です。「これでいいのか」という不安感、先の見えない恐怖感、そして受験期終盤に学校に行かなくなってから感じた孤独感。そんな気持ちに押しつぶされそうになった時、私たちは、先生方がいつもおっしゃっていた「受験は団体戦である」という言葉の意味を、ようやく理解できました。辛さに耐えきれなくて涙がこぼれるような時にでも、「あなたなら大丈夫」と不安を笑い飛ばしてくれる人々に、私たちは支えられているのです。

私たちは、今日という日を迎えるまで、本当に多くの方々に支えられて歩んできました。18年間、どんな事があろうとも、私と向き合い続けてくれた父と母。勉強だけでなく、人として豊かであり続ける大切さを教えてくださり、時には厳しく接しつつも、生徒の自主性を重んじてくださった先生方。先輩と呼ばれるには未熟だった私たちを信じてくれ、今

ではもう立派に本校を牽引してくれている後輩のみなさん。私たちが温かく見守ってください、ありがとうございました。

そして、4回生のみなさん。ここまで歩いてこられたのは仲間のおかげです。私が附属で得た一生物の宝は、友です。

時が流れるのは早いもので、ついに、これまでの時間の3分の2以上を共にしてきた仲間と、離れる時がやってきました。一人ひとりが、期待や不安、葛藤を抱え、新たな旅路に出発しようとしています。今日という日は別れではありません。私たちには「附属」という帰る場所があります。再び4回生が集まる時に、それぞれが様々なところで様々なことを吸収し、大きく成長した姿を互いに見せ合えるようになりましょう。本当に今までありがとうございます。また会える日を楽しみにしています。

たくさんの方々の深い愛に囲まれて歩いてこられたことに、感謝の気持ちで胸が一杯です。たくさんのお愛をありがとうございました。

平成30年3月1日
卒業生代表